

社寺建築及臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第早仕候
(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不充分的なる檜材は干割狂ひ等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社寺工務所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣鶴見町

社寺工務所鶴見支所

福岡市外壘箱町馬出松原

社寺工務所福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社寺工務所大阪支所

(電話西三三二四番)

- 臺灣檜材
一、耐久防護
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅緻
五、理髮然木
六、木高雅包

昭和四年一月廿四日印刷
昭和四年二月一日發行
行 (第四百七號)

不許複製

料告廣一統		
四分	一分	一分
頁	頁	頁
金	金	金
五	九	五
圓	圓	圓
事之金前		

價定一統		
一ヶ年	半ヶ年	一ヶ年
金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳拾錢
送料共	送料共	送料五厘
事之金前		

編輯兼 小 林 順 義
發行人 鈴 木 日 雄
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
電話高輪六〇二四番

編輯事務所ハ發行所ニテ取扱フ

發行所 統一發行所
振替東京五一〇七一番

目 次

法華經の名句……………	本多日生
日什大正師略傳……………	竹内日照
社會教化大講演會記事……………	……………
知法思國會第四回懇談會記事……………	……………
教 報……………	……………

號月三年四十三第



法華經の名句

- 緒言……………一
 一、佛實に就て……………二
 (イ)三輪妙化 (ハ)相々實相
 (ロ)三徳有縁 (ニ)深信解相
 二、法實に就て……………三
 (イ)三説超過 (ハ)四句要法
 (ロ)十喻稱歎 (ニ)是好良業
 三、譬實に就て……………元
 (イ)別頭付暢 (ハ)遣使還香
 (ロ)諸佛所讚 (ニ)棄身存法
 四、本章鈔の結文……………六

本 多 日 生

緒 言

法華經は其の意義の方から申せば、所謂釋尊の出世本懐の經と稱して、最も大切な事が説かれて居るのである。さうして其の文章の方からすれば、支那に於ける譯經家の第一人者と稱せられる羅什三藏の心血を注いで譯せられた經典である。それ故に文章としても意義としても卓越して居る經典であるといふことは既に世の定論である。であるから八卷に亘つて總ての經文が意味も深いし、文章も好いといふ

ことが言へるのである。天台智者の如きは「一々文々は是れ眞の佛なり」とまで讃歎せられたのである。故に其の文章の何處が好くて何處が好くないといふことは言はれない譯であるが、而も其の中に於て更に文章と意義の秀で、居る所を少しく摘出して語つて見たいと思ふ。

聖徳太子は「諸法實相」の一句を擧げて、此の中に法華經の全部があり、又總ての事柄を領解する知識の源が此の四字に含まれて居ると言つて、法華義疏といふ解釋書の中に「一句萬了の金言」とこれ

を申して居るのである。此の一句萬了といふやうな言葉は實に尊い言ひ現はし方で、此の僅か一句四字で何もかも判つてしまふと申されて居るのである。又傳教大師は法華秀句といふ書物を書かれて、法華經の中の秀で、居る文句を十箇所抽出して、それに自分の意見を加へて三卷の有力な書物が出来て居るのである。又妙樂大師は法華經の中から二十箇條を擧げて、矢張り文章に基いて法華經の卓越せることを説かれて居る。天台大師も本門の十妙、迹門の十妙といふやうに數へられる時には、何れも其の妙たる所以に就ての證據として經文が引證されて居るのであるから、それが取も直さず天台智者の見たる法華經の名句である。又天親菩薩の法華論に於ける十無上、即ち十箇の卓越して居る點に於ても皆經文に基いてそれを論明されることであるから、矢張り十箇所の卓越した文章が出て來る譯である。左様にして考へれば先輩の見られた所に依つて色

(イ) 三輪妙化

それはどういふ意味であるかと申せば、三輪の妙化と言ふべきものであつて、本佛釋尊の御意と、御身と、御口から出た其の説法、此の慈悲を意とし、又勝相と申して美しき相を持つて世に出られて尊き教を説かれた事である。それが唯だ今度一遍天竺に出られたといふやうなことでなくして、其の三輪の意と身と口との働きが、時間には始無く終無く處に於ては方處を絶して、全法界に對して其の活躍を爲されて居るといふ廣い意味に現れて居るのである。

毎に自からは是の念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめん

「毎」にと言へば、いつでも、といふ事であるが、併し其の前に、此の佛は始無き永在者であるといふことが能く説かれて居るのであるから、此の始無き實在

々法華經の名句がある譯であるが、今自分はさういふ諸先師の名文章と考へられた事に關係なく、法華經の三寶式に基いて名句を抽出して見ようと思ふのである。三寶とは佛寶即ち佛に關する側の名句、法寶即ち法華經の經典を讚歎して居る名句、僧寶即ち法華經を宣傳する本化の菩薩に就ての名句を擧げて、御紹介して見ようと思ふ。勿論法華經の名句はそれには限らないので、或は法華經の五法(教、行、人、理、果の五つ)に就て抽出しても宜い譯であるし、いろ／＼其の問題に依つて名句の見方があるけれども、今は暫く宗教的の意味合から三寶に就ての名句を擧げて見ようと思ふのである。

一、佛寶に就て

第一に佛寶に就ての名句としては何處が一番好いかといふことになるが、多少の議論もあらうが先以て壽量品の結文の二十字が最も好いと思ふのである。

の佛がいつても、といふことになるが、非常に長い時間を通じて始無く終無くない、つても、といふ事になる。唯だいつても、と言つても限りある壽命の者が言ふのは、例へば「いつてもあなた方のことを思つて居りました」と言つた所が、二十歳の娘が或る男を想うて、それが四十歳で死んだとすれば、モウ夜も晝もいつても想つて居つたといふことが二十年にしからぬ。其のいつても、といふ言葉は同じやうであつても實在不滅の如來が始無く終無き時間を通じていつても、といふのであるから、此の「毎」の一字が非常な力に現れて來るのである。毎自作是念の唯だ「毎」といふ字だけを考へたらいつても、といふ事だから、其の時間が短かつたならば價值が減ぜられるけれども、其の前に始無く終無き實在の義を明にして置いて、其の佛がいつても、と仰せられるから非常な尊いことになる。そこで阿彌陀様の四十八願とか藥師如來の十八願とかいふものは其の價值の桁が違つ

て来る、阿彌陀様は五劫兆載といつて、永いと言つても五劫といふ年限である。壽量品の佛は始無く終無しといふ、其の無限の時間に於ての話になつて来るから、まるで問題が違つて来るのである。さういふ事を考へないで唯だ「一生懸命考へて居ります」といふやうな言葉だけを聞くとエライ事のやうに思ふけれども、時間が短いといふと矢張り其の價値が無くなつて来るのである。「あなたの事を一生懸命に考へて居つたけれども、併し又他に氣が移つて今ではモウ想つて居ない」といふことになつてしまへば矢張り其の熱心は價値が無いのであるから、其の點が大事なのである。日蓮聖人が壽量品の佛に就て、他の尊敬すべきものよりも尊いといふことを力強く言はれるのは今私が申す事から起るのである。それは哲學上の合法的の基礎に於てそれが論ぜられなければならぬのである。

其の實在の如來がいつでも斯ういふ事を考へて居

其の肉體が水に溺れて居るのを救ふならば、手で捉へて船の上に引張上げるのだが、心が迷つて居る者を救ふといふことはどうしたら救へるか、そこを考へなければいけない。或は病氣に罹つて居る者を救ふといふならば、それは藥でも救へる、或は又御祈禱でも救へるやうに見えるけれども、心の迷ひを宗教的に救ふといふことはさういふ事とは違ふのである。信心をしたら商賣が繁昌したとか、體が達者になつたとかいつた所が、それは有爲の果報であるが故に、如何に榮えた商賣も、如何に壯健なりし體も或る時間を経過すれば無常の風に誘はれて果敢なき有様になるのである。そんなことで救はれたの救はれないのと言ふことは問題にならぬ事である。と言つて病氣を癒すのがつまらぬとか、商賣が繁昌するのがつまらぬと言ふのではない、それも相當希望のあるものだけれども、宗教といふものはモツと根本的の絕對觀念といふものを持たなければならぬの

るといふ「作是念」といふことが其の次の言葉で表はされて居る、それは「以何令衆生」何を以てか衆生を救ひたい、どうぞして衆生を助けてやりたいといふことなんである。其のどうぞして助けてやりたいといふことは佛の慈悲であるから、其の慈悲の精神がいつも「吾々衆生の上に覆さつて居ることが、佛の意輪といふ意の有様である、其の「以何」といふことが事實に働いて現れて来る時、先づ身を現じてそれ等の衆生に近づいて、さうして之を濟度するには教を説いて聽かせなければならぬ。



此の救ふといふことはどうしても説法教化でなければならぬ、唯だすくふと言つても、泥輪ならば貧で掬へば宜い譯だけれども、人間を救ふといふには

である。其の大きな術から考へると、達者であるの、貧乏だの金持だのといふことは何でもない事だといふことが出て来るのである。斯う言ふと「あの坊主はエライ事を言ふ、達者でもつまらぬ、金を儲けてもつまらぬ、そんな事があるものか」と言ふだらうけれども、それは其の人が哲學や宗教を論ずる迄に觀念意識が進歩しないものだから、其の意味が分らないのである。極く露骨に言へば、そんな事が分らぬやうな者は門前拂を食はしてしまへといふのが本當は宗教の立場である。

だからお釋迦様の出で來られたのは、病人を救ひに來たとか、商賣を援けに來たとかいふことではなかつたに違ひない。此の本佛釋尊の身を現じ法を説くといふことは、今申す人々の心を本當に救つてしまはなければならぬ、其の景物としては體が病氣では矢張り心が悶えるし、食ふに困つて騒ぎ出せばマア餌も遣つて置かなければならぬといふことが起る

けれども、佛の世に出た本當の目的といふものはそこには無かつた。さういふ事も宗教の副作用としては或る程度の必要が起つて来るけれども、モウ一つ根本を考へて置かなければならぬ。

それには人々の心の暗を照して、そこに正しい意味の信念、信念とはそこに満されて、成程さうであつたかといふ強き安心立命を與へなければならぬのである。さうしてそれに基いて淨き意に生き、善き行を爲して其の人が永遠に救はれて行く、現在生活の上にも精神的の幸福を享受し、永遠の生命は無限の向上を辿つて佛にまで成るといふことを知してやらなければならぬ。それには教を與へて其の人心を教化善導するより外ないのである。

其の事を唯だ救ひといふ言葉で言表はすのであつて、すくふと言ふと綱を擲ひ上げるやうに思ふけれどもさうではない。本當は善き教を聽いて「成程さうかな」といふ領解信解のそこに教はれるとい

なものは自發的には決して起らないものである、必ずや傳染の系統といふものがある。深川とか本所の方からコレラ患者が出たといふ、ごんなに悪い物を食つても、コレラ菌の系統といふものが無ければコレラにはならぬ。そこで其の系統が何處から來たか横濱から來たか上海から來たかといふことを必ず警視廳で調べるのである、さうするとそれが船員であつたとか、横濱に荷揚人足の手傳に行つたといふやうなことから微菌を持つて來て、それから發病したといふ必ず系統があるのである。其の如くに人間が悪くなるといふことも、必ず言論文章の系統のあるものであつて、其の反面を言へば、人が善くなるのに善き教を聽かず善き文章を讀まずしては、一人の人間だも向上するものではない。花といふものは水が切れたら直ぐ萎れる、芍薬を活けても牡丹を活けても、其の花瓶の中に水を入れずに置いていつも生々して居る花といふものは無いが如くに、人間は教

ふことが起る、それより外はないものである。説法教化に依らずして人が教はれることは無いといふのが娑婆世界の通則である。娑婆世界の衆生は耳根得道の人と言つて、耳から教はれるのである、即ち聲を以て、教に依つて教はれるより外教はれないものである。其の代りに又悪くなるのも聲に依るのである。聲の次は文字であるが、文字は聲の現れたものである。口で話した事を書いて文字になつて來るのである。今日思想が悪化するといふ事でも、これは悪い話を聞き、悪い文章を讀むといふ、言論文章の悪いものに依つてのみ人の思想が悪化して行くので、それを止めさへしたならば決して悪くはならない。悪い話を聞かせず悪い書物を讀ませさへしなければ、人間は自發的には決して悪くならない。「そんな事はあるまい」と人は思ふけれども、そこは實に不思議なものである、例へばコレラ病といふやう

の水が切れたならば到底生きて正しい人間になつて行くことは出来ない。

此の事を釋尊は徹底的に突止めて居る、さういふ點に於ても今の人間は偉さうな事を言ふけれども、間誤々々して居るだらう。今や悪思想の防止に就ても、どうしたら宜からう、斯うしたら宜からうと言つて騒いでばかり居つて、矢張り悪い文章言論といふものを充分に取締るといふことを考へない。研究は自由だからやらして置いたら宜からうといふ議論の方が多し、大學に於ける社會科學研究などでも抑壓せぬ方が宜からうと言ふ、併しあれを取締らすに自由にやらせて置いたならば、今の二千人の悪化した學生は忽ち二萬人になり、又それ等の者に自由に喋らせて「善い悪いは第二の判斷だ、マア一つ言はしてみる」といつて演説をして歩かせたならば、直ぐに二十萬となり二百萬となつて我國は潰亂の巷に導かれるのである。そんな事を言うて居るのは實に

生温い話であつて、釋尊はモウ其の事に就て徹底的に判断を下して居るのである。教を説かざるに於ては人は教はれない、惡しき教を與ふれば如何なる者でも惡化する、故に惡知識は虎狼よりも恐るべきものである、「善知識は全梵行なり」「善き教を宣傳する人があれば如何なる人間でも向上するものであると申して、釋尊自らは大善知識者として人類の世に出現して説法をせられたものである。

それは哲學的に論究されて居る事なものである、人間を教ふ方法といふことに就ては實に佛教は明瞭に備つて居る。だから佛教で佛の子と言ふのは、基督教で言ふ神の子といふやうな意味とは全然違ふ、基督教で神の子と言ふのは、神様が人間を拵へて呉れた、魂を呉れたといふやうな事を言ふのである。「それは本當に呉れたのか」と言ふと、「イヤ一寸待つて呉れ」「どうだ」と突込むと、「へへ」といふやうなことを言つてそこが非常に曖昧である。最初は兎に

佛教の定則である。さういふ事も洵に合理的な言表はし方で、基督教の方は御伽話のやうな意義に於て神の子と言ふのであるが、佛教に於ては今日の知識で研究しても意味深遠なる哲學的の言表はし方に於て佛の子であると言ふことが非常に違ふ點である。さういふ風に佛はお考になつて、此の娑婆世界に時を計り處を測つて、中天竺の迦毘羅衛城に降誕せられたのである。あの當時の印度は非常に文明も開けて居つた、又將來に於ても釋尊が印度に出られたことが、最も意義ある事であるといふことが分つて来るだらうと思ふ。今のところでは東洋亞細亞といふものが間違つて居るから本當に分らないやうであるけれども、先年タゴール先生なども言うて居つた、將來東西の文明が接觸をすれば、機械的の文明は西洋が長所であり、精神的の文明は東洋が長所であつて、東洋の此の偉大なる精神文明と西洋の科學の文明とが握手して、初めて最後の人類の文明が

角拵へて呉れたと言ふ、神様が魂を呉れたものならば人間が惡い事をする罪は神に責任があるではないかといふことになつて来たものだから、「一寸待つて呉れ」といふので間違々々して居る。佛教で言ふ佛の子といふのはそんな事ではない、「佛口より生じ法化より生じて佛法の分を得たり」といふことを常に申して居るのである。佛の口から生れ、法の教化より生れると書いてある、佛が説かれる所の教を聽いて成程と感心した時、それが佛の子になると言ふのである、つまり佛法の教の中に信解を生じた時、これを眞の佛子と言ふのである。信解に背けばそれは狂へる子と言ふ、自我偏の中に「狂子を治せんが爲の故に」とある、狂子である、教に反抗する者は狂子である、教を奉ずる者は眞の佛子であるといふことになつて居る。佛教で言ふ佛の子とは、佛の口から出る説法を聽いて其の教に従ふ者を眞の子と言ふ、それを奉じなければ氣違ひの子と言ふ、これが

完成するのであると言つて居つたが、それは大體違ふ事であらうと思ふ。さうなると印度の價值といふものは、矢張り世界第一のヒマラヤ山を持つて居るが如くに、世界に於て有力なる地位を占めるものである。故に自分は釋迦如來が印度に降誕せられて此の偉大なる佛教を説かれたといふ事實は、矢張り時を得、處を得た立派な事であると思ふ。左様にして佛は出現説法をせられた、又其の身に於て爲された事も、八相の儀式其の他一代の身を以て爲された事には洵に何とも言ひ様のない尊さがあるのである。釋尊の相に就て言へば、一寸之を拜んだだけでも人々は教はれたのである。どのくらい腹を立て、行つても、釋尊の側に行つたならば直ぐに意が穏かになる、非常な悲しみに包まれて居る者でも釋尊の側に行けば精神が平和に歸するといふ、偉大なる徳化を持つて居られたことは事實として考へなければならぬ。非常な兇惡なる者が釋尊に反抗

しても遂には皆改心して居る。それは人間ばかりではない、毒蛇であるとか虎であるとかいふやうなものも、佛の前に出れば皆柔順なるものとなつた、釋尊の涅槃の時に五十二類といふ澤山の物が集つて皆穩かな姿を現じて、喧嘩の神様までも其處に行つて「モウ喧嘩は廢めます」と言つて居るが、確に一時はそれだけの感激を持つたものに違ひない。さういふ風な人はあるものと思ふ、非常な偉い徳を有つて居る人が親切な心を以て迎へれば「お前は何の爲に來たか」腹が立つて仕様がなから來ました」さうか、マアさう怒るな」と言はれればそれで精神が平和に歸したに違ひないのである。畏多い話であるけれども、日本で例へば明治天皇のやうな方がお在になつて「マアそんなに怒るな、庭でも散歩せよ」と言はれたならば「ハッ」といふ譯で、一遍に議論も何も無くなつてしまふだらう。佛がさういふ風な事實上の感化を與へられたことも廣大無邊であつた

と思ふ。それ故に随分兇惡なる事をして居つた惡魔のやうな者までが釋迦に依つて教化された、それは説法や何かではない、釋尊の勝れた相を拜し、慈悲に満ちた温顔を拜して教化されたのである。又其の聲が非常に立派であつた、釋尊から一言言はれれば、モウ理窟などを聴かないでもそれで感心したのである。此の音聲の感化が廣大無邊であつたとのお経にも説いてあるが「汝悲しむ勿れ」と言はれればモウ悲しまないでも宜いやうになる。釋尊の音聲を聞けば如何なる者でもそれに依つて化せられたので、方便品には「悦可衆心」とある、衆の心を悦可すといふことは、誰でも釋尊の所に行けば悦びの心に満ちたのである。だから其の梵音聲といふものは迦陵頻伽の御聲と申して居るが、鶯の啼くのを聞いても、それが爲に癡癡に降るといふ者は無い何となく伸び伸びとして來る、況んや釋尊のやうな偉い方が微妙の音聲を以て吾々に向はれた時には、

其の音聲に依つての感化が廣大なるものであつた。況んや其の言葉に内容があり意味があつて、之を導かれる説法となつたのであるから、一代五十年の説法教化がどういふ効を奏したかといふことは、實に想像するだに恐しい程の効果があつたのである。斯様にして釋尊の現身説法といふものに依つて、其の説法は一切經として傳へられて、今日に至つても十分に佛様の思召しを窺ふことが出来るのである。これが三千年後の今日に傳つて居るだけでも非常なエライ事である。兎に角これが佛説のお経であるといつて、法華經といふものが此の通り完備して傳つて居るといふ事でも、既に釋尊の感化力が偉大であればこそ斯ういふものが傳つて居るのである。割合に佛敎の書物が今日澤山道つて來たのは、釋迦の威徳から他の書物も遺つて居るのである、釋迦が無ければ他の書物も遺りはしない、釋迦を中心にしてそれに感化されて居るのである、又大勢の坊さん

が居つて、今日日本だけでも十七萬か十八萬の坊さんが佛敎の内に居る、それは坊さん自身の力ではない一人の釋迦といふものがあればこそやつて居るのである。斯の如く實に釋尊の徳化力といふものは廣大無邊であつた。又擴げて言へば、佛が身を現するといふことは唯だ印度に降誕した釋尊としてばかりではない、一切の佛、菩薩、神となつて現れて天月水月の關係の如く、左様に應現説法せられること皆釋尊の御力用である、さうして有らゆる救済を與へられて結局は無上道に入り佛身を成就せしめるので、此の尊き法華經に導いて我等を佛にして下さるのである。さういふ事を佛はいつも「休み無くお考へ下さつて居るといふことを思へば、此の『每自作是念』等の二十字を以て、我等法華經を奉ずる者の精神がいつも之に繋がれて行くべきである。であるから梅尾の明惠上人は法華經を讀んで此の二十字の所に至

れば、聲を擧げて讀むことを爲し得なかつた、唯だ涙あるのみで、「每自作是念」以下の二十字は讀み得なかつたと傳へられて居る位である。日蓮聖人も持法華問答鈔の中に矢張りそれと同じやうな意味を言表はされて、

暮れ行く空の雲の色、有明がたの月の光までも心をもよほす思ひなり、如何なる時節ありてか每自作是念の悲願を忘れんや。

と言はれて、夕方の雲の色にも、明方の月の光にも本佛の有難さを感激して行く譯であるが、此の每自作是念、いつでも我等を護られるといふ經文を考へれば、忘れようとしても忘れられるものではない。こつちは忘れることがあつても、佛はいつでも忘れられることはない、此の「毎」の字がそれを語つて居る。それが吾々の心に響くから、こつちも時々といふのでは相濟まぬ、成べくいつでも佛を忘れぬやうにしなければならぬといふことを思ふから此の

も、今日で言へば天地宇宙といふやうな意味であつて、此の廣い天地の一切は釋迦如來が自分で支配して居る處である、此の大宇宙は我が所有に屬し、我が支配に屬するものである、故に我は法王なりと常に言はれるのである。其の次は親の徳を現はすので「其中衆生、悉是吾子」、其の間に生れて居るいきとし生けるものは總て吾が子である、人間ばかりではない、虫蝶に至るまでも含むのである。併し今の佛敎は、悉達太子として出現せられた人間の姿の佛敎であるから、先づ此の衆生といふのを人間として考へても宜しいのである。さうすると此の天地の間に生れて居る人間は悉く吾が子であると仰せられた譯である。ところが此の世界は色々な惱があり苦しみがある處であるから、「我れ一人のみ能く救ひ護ることを爲す」、此の救ひといふことが、前に言ふ敎を與へて救はなければならぬ、からそこに師匠の徳が現れて來るのである。佛敎に於ての救ひ護るといふ

「毎」の字一字が我等の信仰を刺戟することに於て非常な強い力を成すのである、これを「毎自の悲願」と言ふのである。眞宗では彌陀の十八願と言ふのであるが、法華經では「毎に自からは是の念を作す」といふ釋尊の慈悲を現はされた言葉を探つて「毎自の悲願」と言ふ。これを思ふ時吾々の信仰は刺戟策勵をせられる譯である。

(ロ) 三徳有縁

其の次に佛實に關しての名句は、譬論品の今此三界の文である。

今此の三界は皆是我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり、而も今此の處は諸の患難多し、唯我一人のみ能く救護を爲す。

これは三徳有縁の文と申すのである。三徳とは主、師、親と言つて、主人の徳として現れて居るのが、「今此三界、皆是我有」の八字である、三界といふのは婆羅門の敎から此の言葉は出たのであるけれど

ことは前に説明したやうな意味で、どうしても敎を以て救ひ、敎を以て護らなければならぬことになるのである。

婆羅門の敎であると唯だ神秘的に救ふとか護るとか言つて、九字を切るとか、護摩を焚くとか、法衣の袖の内印を結ぶとか、口の内でもニヤ／＼といふやうなことで行くのだけれども釋尊はさういふ事が非常に嫌ひである。魔法みたやうな禁厭みたやうな事をして救ふとか護るとかいふことは言はない、能くわかる敎を以て人に説き、領解を與へて其の人の信解を導いて、以てそこに救ひ護るといふことを爲したものである。それを佛敎でも矢張り救つて貰ふとか護つて貰ふと言へば、何かお禁厭みたやうなことをして、頭の上で九字を切るとか、護摩を焚いて貰ふとかいふやうな、神秘的な怪誕的な事を要求する人が多くなつて來たけれども、それは婆羅門の遺風である。尤も病氣などを癒すにはそんなやうな

事でも癒るのである、それは心理的作用に依つて病気が癒ることもある。併ながらさういふ事は宗教に附随して居る所の小さな作用であつて、それが一番大きな事のやうに思つて居るのは間違である。人間の病氣を癒したりすることは勿論醫術が本で、精神的關係に於て精神療法などが手傳ふといふことも悪い事ではないけれども、併しそれが宗教の生命ではない。寧ろ聖徳太子が爲されたやうに、病氣の事などは施療院とか施藥院といふものを興して行くことが佛敎の教である。釋尊には耆婆といふ醫者が附いて佛の敎化を援けて居つたのである。釋尊が祈禱者を伴つて歩いて「俺は説法をするが、病人の方はお前しつかりやつて呉れ」といふやうな事は決してやらないのである。無論宗教の副産物として、有難いと思つたが爲に精神的に病氣の癒ることもあるし又宗教を信するが爲に無駄使ひをしなくなり、商賣に勉強をし、人の信用も高まつて營業も都合好く行

くやうにはなるけれども、それは副作用であつて、宗教の根本の救ひ護るといふことは、教に依つて人を信解に導くことである。

此の主、師、親三徳の文は譬諭品に出て居るのであるけれども、其の意味を開顯すれば壽量品の本佛に就て言ひ得る事であるから、日蓮聖人の如きは此の文を引證する場合に、釋迦佛供養鈔などには「壽量品に曰く今此三界云々」と言はれるので、譬諭品の文でもそれに因はれる必要はない。一部開顯の上から言へば「壽量品に曰く今此三界」と日蓮聖人の言はれる意味を知らなければならぬ、それでないと法華經の統一的有難さが分らない。何處までも壽量品に於て顯本したる絕對本佛の上に之を持つて來ると、非常に此の經文が意義が深くなるのである。左もなくして、唯だ此の間出家して跋提河の邊に入滅してしまふ釋迦であつたならば、「此の三界は我が有なり」と言つた所が、悉達太子が成道を遂げる前

は他人のものであり、跋提河に入滅した後は又他人のものであつて、僅か五十年の間それを横取りしたやうな話になるといふことを、日蓮聖人は法華取要鈔の中にも論じて居るのである。釋尊の絕對本佛の開顯をしない以上は「今此三界」の文と雖も價値の無いものである。

それ故に壽量品に至つて此の顯本の智眼を以て法華經を見ない限りには、名句も名句とならない譯である、そこを能く知らなければならぬ。唯だ「今此三界」の文が好いといつても、壽量品の顯本の立場から見るだけの智眼を持たない限りには、それほど深い意味にはなつて來ないのである。又從來の法華信者といふものは、直きにそれを日蓮聖人の上などへ持つて來て無暗に振廻して居る。それは何處へでも附けようと思へば一部分は附くけれども、絕對的主、師、親三徳者がさう二人も三人もあるものではない。斯ういふ場合には釋尊になる、斯ういふ場

合には日蓮聖人になる、又斯うやれば自分にも來る……などと言つて捏ね廻すのは實に遊戲的の學問である。そんな事をへアボコ坊主が古來やつたやうなことは實に唾棄すべき事であつて、モツと嚴肅に法華經の名句などは考へなければならぬ。ア、も言へる、斯うも言へるといふやうな曖昧な事は廢めなければならぬ。それであるから絕對本佛の上に於てのみ「今此三界」の文などは考へるが宜いのである。

(ハ) 相々實相

今一つは提婆品にある所の、
 深く罪福の相に達して徧く十方を照したまふ、
 微妙の淨き法身、相を具すること三十二、八十
 種好を以て用つて法身を莊嚴せり
 此の六句三十字が非常に宜しいと思ふ。これは龍女が佛を讚歎した讚佛偈であつて、これを相々實相と申すのである。相々實相といふのは有限の相に於て

無限の實相の意味を知るのである、無限といふものを唯だ絶對に考へてしまへば大きく擴つてしまつて譯が分らなくなつてしまふ。基督教でも眞宗でも其の他淺薄な宗教といふものは、相々實相といふ哲學的理智を缺いて居るのである。相々實相とは有限の儘に無限を見、相對の中に絶對を見るのである。其の事が分らぬ間は本當の宗教の信解は出て來ないのである。

それはどんな事かと申せば、假に富士の山を描くといふのにどうするか。富士の山を本當に描かうと思へば大きなものだから餘程大きな屏風を描へて呉れなければ描けない、あれは甲斐の國にも駿河の國にも相模の國にも跨つて居る、三國に跨つて居る大きな山だから、本當の富士の山を描かうと思へば先づ東京から福島縣位の大きな屏風を描へて呉れなければ描けない……、斯ういふ風な頭腦が「福ひを爲すのである。基督教の神は形無くして在さざる處

此の天地に瀾漫して居る所の地、水、火、風、空、識。土であるとか水であるとか、一切の宇宙全體それが其の儘一つの佛だと言ふので宇宙神教を説くのである。一寸聞くにエライ大きなやうであるけれども、信仰といふものはそれが爲に減茶々々になつてしまふ。だから大日如來の説法といつたならば、人格的の人が口から説法をするのではない、バツと風になつて飛んで來て松の枝を鳴らして行く、あの松が枝傳ふ風の音が法身の説法ぢや、或は又波の音がドブン／＼といふ、是れ説法なり……、さういふ事を大變偉いやうに思つて居る。眞言でも禪宗の坊さんでも、さういふ事を言つてそれで絶對の佛を説き得たやうに思つて居た。或は又大宇宙即佛であるといふやうな事を言ふ、それは天台も引懸り、日蓮門下でもそんな事を言つて居る者があるやうであるけれども、皆基督教の「形無くして在さざる處無し」といふ思想と同じものである。これはモウ宗教

無しといふ、それは形があると言へば有限のものになつて來るので、形無くして在さざる處無しといふ空氣のやうな、瓦斯のやうな事を言へば絶對といふことが考へられると思つて居る。親鸞上人は阿彌陀如來と言つても姿が無い、光の姿にて在ます、不可思議光如來と言つて考へることの出來ないやうな光の佛である、ピカツといふサーチライトみたいなものだと言つて居る。是等は皆具體的、具象的に考へると有限になつて來るから、有限のものは壞れるといふ考を以て、そこに無限を説かうとするものであるから、さういふ「形無くして在さざる處無し」とか「光の姿にて在ます」といふやうなことを言つて間違々々して居るのである、それが宗教の信仰の最も好い所に至つてさういふ不明が引懸つて居る。弘法大師のやうな精巧な人でも、佛は絶對のものと言はなければならぬから大日如來と言ふ「大日とは何だ」それは六大即大日だ……、六大と言へば

の信仰が城に白旗を立て、降服をした落城の姿であると言ふのである、それは哲學の爲に宗教が城を明渡したやうなもので、そんな事を言つたならばサテそれを自分の信仰の對象として拜まうと思つた所が、形無くして在さざる處無し……、それならば何も神様と言ふことはない。神の恩寵なんと言つても、それは自然作用みたやうなものである、お日様が熱を與へて呉れる、空氣が吾々の呼吸を助けて呉れる、さういふ唯だ自然の作用を恩寵と言つて無理に神といふ名を付けて居るだけである、實にさういふ事は宗教の熱烈なる信念を失ふ源であつたと思ふ、それは佛教の内部に於ける研究でも、又世界の宗教と哲學との對抗に於ける失敗でも同じ形である。

然るに法華經は今此の提婆品に於て龍女が釋尊を讚めた言葉に、それと正反對の事を言つて居る。所謂相々實相と言つて、一つの相一つの相に實相とい

ふものが現れて居る、三十二相の佛様と言つて、其の眼は優しい青蓮の 踏、實に慈愛に満ちた所の眼である、或は其の口元を見ても、其の音聲を聞いても其の一相々々が有限なるもの、中に無限の徳を籠めてさうして發現して來て居るものである。其の有限の中に無限を見て行くのである。それは恰度富士の山でも、上手な畫家が描けば、小さな扇子に富士の山を描いてもそれで富士の山の眞がそこに現れて來なければならぬ。物の大小などといふことは關係無くなつてしまふのである、どんな小さな扇子に描いてもそこに富士の全體を表はし得るのである。寫實と理想の關係といふものは、唯だ寫眞のやうに富士の山を其の儘寫眞に寫して來たらそれで宜いかと言ふと、それとも又違ふ、理想といふものは其の富士の山をまるで離れてしまつて、唯だ空想を描いたら宜いかと言ふと、全然離れてもいかぬ、富士の山の事實と、富士の山を表現する所の壯嚴とか雄大とか

いふ神聖なる意味を繪圖したる其の扇子の中に、實際の富士の山の形に似せて、そこに含ませて居る、神韻渺々たるものを表はす所に畫家の手腕がある。其の實際と理想とが小さな扇子の上に躍動して居る所に繪畫の價値といふものがあるのである。何事でもさういふものである、人間が偉くなるからといつて、頭ばかり大きくしなければならぬ譯ではない、此の小さな頭の中に萬卷の書を讀破して、千年萬年の後迄も光り輝くやうな事業も畫策される、其の有限の中に無限大のものを包擁する所に尊さがあるのである。

じ大きな眼の中に言ふに言はれぬ無限の慈悲、無限の智慧、無限の働き、輝きといふものを持つて之を活躍せしむることが出来る。それが相々實相と言つて、有限の相一つ一つに無限の實相が活躍して居るといふことを言ふのである。それが分らないで、實相と言つたら唯だ大きくしてしまはなければならぬ、有限の相は有爲のもので其の儘消えて行く消滅のもの、實相は唯だ絶大にして吾々の手の及ばぬものといふ風に考へて居る、そこに思想の未熟な所があるのである。

相を具すること三十二」此の微妙の淨き法身といふことが非常に尊いのである、普通に言へば法身といふことは絶對の身であるから、サーチライトみたいなことになつてしまつて相といふものは無いのである、形無くして在る處無しといふのが法身である。それであつたら微妙とか、淨いといふことは言はれない、何でもかでも一切が皆法身といふことになるから相や形といふものには關係の無いことになる。だから昔から流しの水が泥濘に落ちるチャラ／＼といふ音も說法ぢやと言ふ、「それならおたふくが小便する音も說法か」「それはさうぢや說法ぢや」といふことになつて、微妙だの淨いといふ意味は無くなつて來る。然るに今此の女人は佛に就て微妙の淨き法身と申して、絶對不滅の如來が其の儘美の相を持つて居られる、さうして三十二相八十種好といふやうな有限のそれ／＼の相があつて、而もそれを用つて法身を莊嚴せられて居ると言つて居る。

ところが今此の龍女は佛のことを讚歎して、佛様の御心の方は「深く罪福の相に達して徧く十方を照したまふ」で、どのやうな事が罪であり、功德であるかといふことを一々御承知になり、さうしてそれが部分ではない、十方法界を照し輝かすやうな悟をお持ちになつて居る、其の中から慈悲の導きをお與へ下される譯である。御相の方は「微妙の淨き法身

相を具すること三十二」此の微妙の淨き法身といふことが非常に尊いのである、普通に言へば法身といふことは絶對の身であるから、サーチライトみたいなことになつてしまつて相といふものは無いのである、形無くして在る處無しといふのが法身である。それであつたら微妙とか、淨いといふことは言はれない、何でもかでも一切が皆法身といふことになるから相や形といふものには關係の無いことになる。だから昔から流しの水が泥濘に落ちるチャラ／＼といふ音も說法ぢやと言ふ、「それならおたふくが小便する音も說法か」「それはさうぢや說法ぢや」といふことになつて、微妙だの淨いといふ意味は無くなつて來る。然るに今此の女人は佛に就て微妙の淨き法身と申して、絶對不滅の如來が其の儘美の相を持つて居られる、さうして三十二相八十種好といふやうな有限のそれ／＼の相があつて、而もそれを

普通は之を應身と考へるのであるけれども、其の三十二相八十種好を用つて莊嚴せり、此の有限の相と無限の佛とを一つに考へて説明したといふ此の思想は、世界の宗教觀念の最後を支配するものである。哲學と宗教との智解信解が絃々相摩するに至つて、どうしても哲學を捨てることも出来ない、宗教を捨てることも出来ない、如何にして之を握手せしむべきかといふ所に斯ういふ大哲理、大信念といふものが現れて、初めて哲學の理智と宗教の信解とを握手せしめることが出来る。其の最後の大任務を果すものは、人類の文化に單り法華經あるのみである、それが一闍浮提廣宣流布といふことの意味になつて來るのである。最後は世界が間違つて居る時、一つのそこに解決を與へさへすれば事は足るのである。此の相々實相といふ大哲理を佛身觀上（上）に現はして居るといふことが、これ亦法華經の有難い所で實に名句である。これは弘法大師が法身は六大だと言つ

たり、或は親鸞上人が光の姿にて在ますと言つたり基督教が形無くして在まする處無しと言つたりするやうな間違つた者から見れば、實に此の龍女が釋尊を讚歎して申上げた言葉は、まるで比較にならぬ大哲學を以て基礎とした信解である。併しそこ迄はなか／＼學問が及ばないのである。弘法大師の書いて居る書物を幾ら讀んでも矢張り間違々々して居る。これは社會に向つて本當の哲理的研究を奨めなければならぬ、西洋の哲學でも、相對即絕對といふことが分らなければ哲學の眞理は分らない譯である、現象即實在といふことに徹底して、其の大眞理を宗教に應用すれば、自ら斯ういふ思想が出て來るのである。

(三) 深信解相

今一つは分別功德品に説かれて居る所の深信解相の文であつて、

深心に信解せば、則ち爲れ佛常に普聞囑山に在

して大菩薩、諸の聲聞衆の圍繞せると共に説法するを見ん、又此の娑婆世界、其の地瑠璃にして熾然平正に、闍浮檀金以て八道を界ひ、寶樹行列し、諸臺樓觀、皆悉く寶をもつて成じ、其の菩薩衆咸く其の中に處せるを見ん、若し能く是の如く觀すること有らん者は、當に知るべし、是を深信解の相と爲す。

此の經文が佛身觀上に非常に大事な事である。此の壽量品に説かれた教を信解すれば、其の信解の儘そこに勝れた智慧が成立するのである。此の壽量品の教に至れば信智全く一體に歸するので、信すると言つて、有難いと思つて居る佛様はいつも此處にござるといふ本佛の實在を信解する其の信仰が、其の儘大きな智慧なのである、所謂人格實在論の大智慧に一致するのである。他の六大常住とか、一念三千とか色々な觀念觀法は、此の本佛實在の信解に較ぶれば低いものである。さうして此の深信解は又一方に

其の儘これを深信觀成と言ふのである。深信解相は其の儘深信觀の成就したものであつて、信仰の極所其の儘大智慧であるといふことを説くのである。斯ういふ話になつて來たら基督教や淨土宗などは側にも寄れない、こちらは信念を其の儘ズツと説き切るといふと、深信解相は即是れ深信觀成なりとなるのである。其の事が茲に説いてある。

それはどんな事かと言ふと、其の信念の現れた所は、佛はいつでも普聞囑山においてになつて衆生の爲に説法を爲さる、恰度今法華經の時に釋尊が衆生教化を爲さつたやうな事が其の儘實在的のものであつて、此の娑婆世界を穢土のやうに思ふ、そこが其の儘淨土の有様になるのである。さういふ實在の意味が、世界に就ても佛に就てもあるといふことを信解することが出来る。決して他に淨土を求める必要も無ければ、天國を求める必要も無い、又釋迦如來を捨て、他に實在の如來を求める必要も無い、應

身即法身であり、娑婆即寂光であつて、其の穢土の如く見えし娑婆、それが坦然平正、瑠璃を以て地と爲す世界である、應身の生滅の如來と見えし釋迦、それが常在靈山の如來である、「常在靈山一痕の月、影法界に浮んで無邊を度す」といふ言葉があるが、常在靈山の月は其の儘動かせば十方に活躍せられるから、いつも耆闍崛山に在すといつたからとて決して其處に働かすにござる譯ではない、いつも靈山に在し、同時にいつも十方に活躍したまふ、いつも吾々の側にお護り下され、同時に全法界に活躍を爲さる佛であるといふ風な意味が非常に能く現れて、吾々の宗教的信解を満たすと共に、哲學的大眞理に合した所の佛が活躍を爲さるのである。

斯ういふ三輪の妙化と言ひ、三徳有縁と言ひ、相々實相と言ひ、深信解相といふ事柄に於て釋尊を見て行くのであるが、これ等の經文は皆簡單明瞭であつて、「每自作是念」の文と言ひ、或は「今此三界」の

文と言ひ、或は「微妙淨法身」と言ひ、或は「常在耆闍崛山」といふが如き文はこれを能く記憶して、さういふ意味から離れないやうに心掛けて行けば、法華經に基く正しき信仰を維持することが出来るのである。

二、法寶に就て

第二に法寶に就てお話しすれば、法寶はさうむづかしく考へなくとも有難い意味は直ぐに分る譯である

(イ) 三説超過

第一は法師品に説かれて居る所の三説超過の文である。

我が所説の經典無量千萬億にして、己に説き、今説き、當に説かん、而も其の中に於て此の法華經最も是れ難信難解なり。

難信難解といふことは稱歎する言葉で、其の前の所には「藥王今汝に告ぐ、我が所説の諸經、而も此の

經の中に於て法華最も第一なり」とある其の意味である。これを三説超過と申すので、三説と言ふのは己説、今説、當説の三つを言ふのであるが、己に説くといふのは法華經より以前に説かれた四十餘年の有ゆる經々を指し、今説くといふのは法華經の會座に來つた説法で即ち無量義經を指し、當に説かんといふのは法華經より後に説かれる結經並に涅槃經等を指すので、即ち三説とは釋迦の一代、初めから終ひ迄の説法を悉く擧げて、而も其の中に於て法華が最も第一であるといふ、三説に超過して居る事を申して、一切經廣しと雖も法華經に及ぶものはないといふことが極めて明瞭に現れて居るのである。

これは外面からさう言ふばかりではない、法華經の内容が其の通りに勝れて居るから、法華最第一の讚歎の言葉が現れたのである。

(ロ) 十喻稱歎

其の次は藥王品の十喻稱歎の文で、十の喻を擧げ

て法華經の勝れて居る事が説かれて居る。

譬へば一切の川流江河の諸水の中に、海これ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し、諸の如來の所説の經の中に於て最もこれ深大なり。

此の喻は一讀頗る明瞭な事であつて、山の中に於ては須彌山の如く、光の中に於ては日天子の如く、王の中に於ては轉輪聖王の如く、法華經が一切經に秀でて居るといふことを十の喻を擧げて稱揚讚歎せられて居るのである。其の全文は茲に擧げないけれども一讀極めて明瞭な事である。尙ほ此の十喻稱歎が藥王品第二十三にあることを注意すべきである。それは既に開顯を終つて、法華經が廣い精神で一切の佛敎を悉く疏通し、融合して、而も藥王品に來て矢張り法華經は水の中の大海の如く、光の中の日天子の如くと言つて稱揚するのは、開顯已後の勝劣と申すのである。一度開顯してしまへば同じものでは

ないか、隅田川の水も根利川の水も海に這入つてしまへば同じものだから、海と言はずに利根川と言つても宜いではないか」……それはいけない、幾ら利根川の水でも隅田川の水でも海に這入れば、海の水とは言ふけれども、併し同じことなら此の水全部を隅田川の水と言つたら宜からうといふ譯には行かないのである。そこが他の宗旨の胡麻化す所で、大に警戒をしなければならぬ。仲好くなつてしまつてから叛逆の精神を起すことがある、朝鮮と日本とは今一つになつてしまつたから彼等も日本人である、平等であるけれども「平等といふなら日本といふ國を廢めてしまつて朝鮮と言つたらどうか」日本の皇室を廢して朝鮮の李王を王様にしても同じ事ぢやないか」……、斯ういふ事を言ひ出すとそれは同じと言ふ譯に行かぬ。同じく開顯して一日本國と言ひながら、矢張り日本と朝鮮とを左様に對立的に言ふならば、朝鮮は日本に併合せられたのである、李王は日

本の皇室の聖徳を以て生命を保つて居るのである、「文句があるならば言うてみい」といふ所の尊嚴を維持しなければならぬ。それを持つて居なかつたのが天台宗の遺損ひで、庇を借して母屋を取られたといふ譯である。これは有ゆる問題に就て警戒しなければならぬことで、思想の問題に就て印度の佛教が遺損つたのも、非常に廣く婆羅門の者も包擁してやり居つた所が、當時の悪い婆羅門の奴が佛教の中に這入つて來て之をひつくり返して、佛教を遂に滅ぼしてしまつた。日本の天台なども廣くやり居つたけれども、其の中から眞言が出、禪宗が出、淨土宗が出て、今では天台といふものはヘナ／＼になつてサツバリ力の無いものになつてしまつた。それは能開、所開と言つて、これを開會する主人になる方と開會される者との能所の關係といふものを忘れたのである。どちらが主であり、どちらが客であるかといふ事は何處までも忘れてはならぬといふことの爲

に、開顯已後に尙ほ其の注意點を忘れないやうに、第二十三番目の藥王品に於て斯の如き十喻稱歎といふことがあるのだと古來申されて居る。

何でも良い事は法華經にちやんとあるのであるから、法華經に教へて居る通りにやつて行けば間違々々しないので宜いのである。ところが佛教が支那を通つて來る間に支那人の變な頭を通して來たものだから、坊さんの系統は釋尊の精神やら支那人の精神やら分らぬやうな事になつてしまつた、洵に頭腦がフラ／＼である、譯の分らぬやうな事を押切つて來たのである。今でも「わがらぬ者は坊主なりけり」と謂はれるやうな譯である、三宅雪嶺氏が文章を書いて「縁無き衆生は度し難しと佛教にあるけれども、衆生は度せられても縁無き坊主は度し難し」といふことを書いて居つたが、これは實に今日の格言だと私は思ふ。今のやうな有様であつたならば、佛教の内部に於て「斯の如き事が本當ではないか」

と言つても、そんな事には耳も藉さなければ心を少しもそこに置かない、間違つて居らうが間違つて居なからうが、そんな事は問題ではないといふ、「然らば何が問題であるか」、「それは唯だ賽錢箱かお布施が問題である」……、それは佛教ではない。何處迄も佛教といふものは佛の本旨を擁護する爲に力を盡さなければならぬ、であるから藥王品の開顯已後の十喻稱歎といふやうなことは能く記憶すべき事である。

(ハ) 四句要法

其の次は神力品の四句の要法の文が大事であると思ふ。

如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此の經に於て宜示顯説す。

これは如來のお有ちになつて居る所の總ての法も力も大事な事柄は悉く此の法華經に於て説き表はされ

て居る、それ故に此の法華經を受持信解するならば、それに依つて佛教修行の目的を達し得るといふ事が説かれて居るのである。此の神力品の四句要法といふことを教に就ては能く考へて置かなければならぬ、これに依つて纏まるといふことは分つて居るが、其の纏まる内容は總て如來を通して現れて居ることを知らなければならぬ。「如來、一切所有之法、如來、一切自在、神力如來、一切秘要之藏、如來、一切甚深之事」といふ風に、法華經は總て如來の力、如來の事が説かれて居る。だから妙法蓮華經は法といふ言葉が表になつて居るけれども、其の内容から言へば大悲蓮華經と言つても宜いので、如來壽量品が中心であるといふことに依れば、即ち如來の事が法華經の生命となつて居るのである。此の神力品の四句の要法も四句共に「如來の一切の」といふ文字が冠せられて居ることに於て其の點を忘れないやうにして行かなければならぬ。

それから此の四句は纏めて之を妙法蓮華經の五字に結んだと申すので、天台智者が其の事を解釋し、日蓮聖人もそれに基かれたのであつて、それから受持成佛といふ言葉が現れて居る。即ち此の四句要法を南無妙法蓮華經の言葉に移して、これを信念し受持すれば現當二世の所願成就するといふことになつて、日蓮聖人は「南無妙法蓮華經」と唱へられたのである、それは神力品の四句の要法が一番の據り所となつて居る。それ故に南無妙法蓮華經の内容といふものは如來の力であるといふことを能く考へて置かなければならぬ、唯だ文字が有難いと思つては違ふのである。妙法といふ字は結構な字であるけれども、唯だ文字だけで意味が無いといふことになれば黒燒屋の看板に妙法と書いてあるのも同じ事である何の妙法だか分らない、文字が有難いならば何でも文字で行けば宜い。さうではない、其の内容に依つて違つて來るのである。妙法といふ言葉が有難いと

いふことは、一應日蓮聖人の遺文の中にもあるけれども、それは眞言的の解釋である、大した深い意味を爲すものではない、それは何も法華經に限らないので、妙法といふやうな言葉は一切經の中どこにもある、阿含にもあれば方等にもあれば阿彌陀經にもある、唯だ法華經にのみ妙法といふ言葉があるなどと思ふのは無學の致す所である。下谷の御成街道を歩いて見れば黒燒屋の看板には皆妙法と書いてある、何處にでも妙法なんといふ字はある譯である。寧ろ世間にある文字を借りたと言つても宜い譯である、元々支那に於て現れた文字であるから、幾ら字の講釋などをして見た所が、字だけならば奥が知れて居る。それに因はれるのは眞言的の頭である、唯だ文字が絶対である、言葉が絶対であると思つて、人格といふものを低く考へる思想である。それは法華經の教理に於ては決して許さるべきものではない日蓮聖人の御言葉に多少さういふ事があるのは、眞

言的影響の上から出て居るのであつて、それほど尊い意味のものではない「薩」とは具足の義であるなどと言ふけれども、それは唯だ「薩」といふ音に過ぎない、或は阿字觀と言つて「阿」といふ字が非常に有難いと言ふ、そんなことで宗教を樹てた所がそれは唯だ發音に因はれた思想に過ぎない。印度には元來さういふ思想がある、日本でも大本教などはそんな事を言つて居る、言靈學などと言つて言葉に非常に意味を考へて居る、「ア」とか「メ」とかいふ言葉が非常に偉いと言ふけれども、實に價値の無い議論である。音といふものはそれを組合せて初めて意義を爲すのである。それは印度の傳統思想であつて、世界に通用しない事である。法華經の上にはそんな「薩」といふ字が有難いなんといふことは何處にも説いてはない、六萬九千三百八十四文字の中に「メ」といふ字であるから尊いとか「サ」といふ音が尊いとかそんな事は少しも説いてない。壽量品で

は佛が拈從和合して是好良藥として子に與へて服せしむといふことに依つて意義があるのである。

それであるから此の四句要法に「如來」の文字を冠せられて、佛の力から現れるといふことを忘れぬやうにするのが、法華の法實に就ての大事な事である。

(二) 是好良藥

次は壽量品に説かれて居る所の是好良藥の經文である。

是の好き良藥を今留めて此に在く、汝取つて服すべし、差えじと憂ふること勿れ。

此の良藥なるものは前に言ふ通り佛が拈從和合してお作り下された、色も香も味も揃つて居る所の尊きものである。擴げればそれが法華經であり、纏めればそれが妙法蓮華經の五字となつて、さうして吾々に與へられた。吾々がこれを服すると言ふのは、此の南無妙法蓮華經を通して信仰をすることである、

て初めて妙法の有難い意味が分るのである。

三、僧寶に就て

(イ) 別頭付囑

次に僧寶に關しての名句であるが、第一は別頭付囑の文である、本化の菩薩に特別な付囑をせられた神力品の四句の要法の前にある所の經文である。

爾の時に佛上行等の菩薩大衆に告げたまはく諸佛の神力は是の如く無量無邊不可思議なり、若し我れ此の神力を以て囑累の爲の故に此の經の功德を説くとも猶ほ盡すこと能はず。

上行菩薩に此の法華經を囑累付囑する爲に、四句の要法をお説きになつたのである。此の文に依れば上行菩薩が付囑を受けるのであるが、其の續きに於て有名な句がある。

日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人間に行じて能く衆生の闇を滅す、無量

併し其の南無妙法蓮華經の内容は前に言ふ佛の力、佛の功德が妙法蓮華經の有難い所以である、單に内容無き言葉が尊いのではない、發音が尊いのではない。釋尊の因行果徳の功德を五字の中に籠めて與へたまふたことに於て尊い意味を生じて來たものである。此の「是好良藥」といふ意味を壽量品に依つて考へれば、父なる醫者があつて、それが好き薬草を蒐めて拈從和合して良藥として病める子にお與へ下された、そこに佛と妙法との關係が能く分つて居る。醫者と薬との關係である。其の薬は自然の草と與へたのではなくして、「諸の經方に依つて好き薬草の色、香、美味皆悉く具足せるを求めて拈從和合して子に與へて服せしむ」とあるので、佛の心を加へての意味である。即ち佛の心から出て之を服めよと言はれる、併し毒に中てられて氣が狂つて之を服まざることに於て、或る方法を講じて遂に之を服ましめるのである。其の慈悲の心の精神的發動を加へ

の菩薩を教へて畢竟して一乘に住せしめん

日月の光が世の闇を除くが如くに、上行菩薩は世に出現して一切衆生の心の闇を照し、そこに善き信仰なり思慮なり修養なりを與へて、其の大勢の人々をして結局した所同一の正しき教に來たらしめる他の言葉を以て言へば文化を大成する。畢竟して一乘に住せしめん」といふことの意味は、今日の言葉にすれば、完全なる理想の文化を建設してそれを完全に至らしめるといふことであつて、それが上行菩薩の任務である。唯だ題目を唱へさせるだけといふやうな意味になつては居ない。「畢竟住一乘」の一乗の行者といふことは、唯だ題目を唱へる、お經を讀むといふのではない、一乗とは世間と佛法、今の言葉にして言へば精神文明と物質文明、其の他の文明の要素を整頓して、茲に各々の長所を發揮し、さうして調節ある文明を開拓して行くことである、所謂理想の文明といふことが一乗の教といふ言葉であ

る、であるから上行菩薩出現の任務は、日蓮聖人が「吹く風枝をならさず、雨壤をくだかず」と言つたやうに、真に永久の平和に達して人類の理想的文明を完成する所まで行くので、日本乃至一閻浮提に對して文化の建設をお考へになつたのである。此の神力品の「畢竟任一乘」の言葉が、上行菩薩の任務として最も大切な事であると思ふ。日蓮聖人の安國論に「信仰の寸心を改めて實乗の一善に歸せよ」と言はれたことが、安國論の生命であると古來申して居るのである。「信仰の寸心」といふのは色々の考へ方があるが、信仰といふも思想といふも、固まれば同じ事であるから、廣い意味に於て宗教ばかりではない、道徳的にも思想的にも或る觀念を打立て、それが小さく分裂して居るやうなことではいかぬ、どこ迄も「實乗の一善」宗教の事も道徳の事も、有ゆる思想の事が根柢に於ては融和されて各々其の所得て發達しなければならぬから、それは總ての文

化を綜合し統一し、各々の長所を發揮しつゝ他面に大なる融合を採つて行く所の理想の文明を建設するといふことが「畢竟任一乘」の精神である、それが實に就ての任務である。

今の佛教界の狀態のやうに、唯だ宗派の内に於て弊害に墮落して、まるでどの宗旨の坊さんも違はない、法華の坊さんに何の特色も無く、却つて迷信などは餘計あるかも知れぬといふ状態になつてしまつては實に情けない事である。上行菩薩の流れを拘むのであるから、何處かに他の者とは性格上に於ても違つた所があつて、道を愛し正義を重んずることに於て、流石は日蓮聖人の流れを拘む人々であるといふ所がなくはならぬと思ふのである。腐つた坊主やがらくた坊主みたやうな者は、日蓮聖人は由比ヶ濱に於て頸を刎ねよと言はれたのである。道を重んぜざるに於ては日蓮聖人の末流といふことがどこにあるか、法華經を讀んだ所が何になるか。

其の點に於てどうしても吾々は文化建設の爲に考へなければならぬ、商賣の爲の宗教であつたり、自己の利害の爲の宗教であつたりするやうなものは將來何の役にも立たない、何處までも如來の本旨を奉じての佛教でなければならぬ。他の話を以て言へば理想の文明建設の爲に微力を致し、志士仁人の仲間立つて世の爲め人の爲に教を打建て、行くといふ堂々たる精神に依つて働かないやうな者は、今後の宗教界に於て存在を許されるものではない、それが此の經文に現れて居るのである。上行菩薩は斯ういふ言葉を以て讃歎せられた、其の後を繼ぐ者であつたならば、今のやうな腐つた精神に居ることは出来ない。日月の光明にも較べられたやうな光榮ある本化の菩薩の仲間居るべき者は、心して祖師を辱しめないやうにしなければならぬ。

(ロ) 諸佛所讚

次には涌出品にある所の諸佛所讚の文である。こ

これは上行菩薩出現の時に如何にも釋尊に對して柔順であつて、さうして吾々は釋尊の化導をお授け申上げようと云つて本師釋迦如來に隨喜の心を生じ、何なりともお役に立つ事があるならば致しませうといふ、實に忠臣が君を思ふが如き心を以て上行等の菩薩が質問をした、それを見て彌勒菩薩が讚めた言葉である。

難問答に巧にして、其の心畏るゝ所無く、忍辱の心決定し、端正にして威徳あり、十方の佛の讚めたまふ所なり

斯ういふ事を彌勒菩薩が上行等の菩薩に對して稱讚の辭を與へられたのである。此の經文に依つて本化の菩薩の性格が又一層明瞭に分る譯で、此の「難問答に巧にして」といふことも非常に意味のある事である。末法の今日は思想の戰に於て何處までも進撃的態度を執らなければならぬ、健全な思想が守勢になつて、悪い思想が攻勢を執つて來るならば

結局は悪い者にやられるのであるから、善き思想に居る者が勇氣を鼓舞して攻撃に轉じて行かなければならぬ。それには色々思想の戦に於て敗を取らぬやうにしなければならぬ、彼等は間違つては居るけれども、簡單に人の心を動かすやうな事を言つたり非常に熱心にやつて来る。坊さんや何かは悪い事は言はぬけれどもボンヤリして居る。向ふは振鉢巻で爆弾を持つて今の世の中を破壊しようとする、坊主は欠伸をして居るといふことになつてしまへば、どうしても對抗する力といふものは無いのである。敵がさういふ態度に出でるならば、何處までもそれに對抗してそれ相當な働きをしなければならぬから、難問答に巧といふことは今日の思想の戦に於て一番大事な事である。日蓮聖人があの當時に出て働かれたのは、色々の反對の者があつたけれども、それはまるで「焙烙千に槌一つなるべし」と言はれて居る彼等の色々議論などは焙烙を持つて来るやうな

ものである、日蓮聖人は金槌を一挺持つて待つて居る、幾ら澤山やつて来てもボンと叩けば直ぐ壊れてしまふ、金槌を一挺持つて居つたならば、焙烙が十枚来やうが二十枚来やうが何でもない。問答をして「一言二言には過ぐべからず」といふほど日蓮聖人は思想言論の戦に於ての勇者であつた。經文の上には「難問答に巧にして其の心畏るゝ所無し」とある、信念理智の上に非常な確信と勇氣を持つて居る。併し表面には宗教家であるが故に、忍辱の心決定して、落付いて洵に品の好い、端正といふ行儀正しき姿があつて、其の奥には侵すべからざる威徳が輝いて居る人々である。それ故に十方の佛が皆お讚めなさるであらう、名譽を諸佛の前に擧げて居る人々であるといふことを彌勒菩薩が説いて居るのである。

の型を逐うて行かなければならぬ、法華の宣傳者は「難問答に巧にして其の心畏るゝ所無く、忍辱の心決定して端正にして威徳あり」といふことを理想して、日蓮聖人の萬分の一なりとも之に倣うて奮闘を續けて行かなければならぬ譯である。さういふ僧寶が法華經に理想されて居る所の僧侶である、唯だ退嬰的に山の中に這入り込んで温順しくして居れば宜いといふものではない、又徒にどたばたやつて居るばかりでもいかぬ、端正にして威徳あり、本當の精神を鍛えて奮闘しなければ駄目である。

(ハ) 遣使還告

次は壽量品の遣使還告の文である、使を遣はして還つて告ぐ、汝が父已に死せりとこれは壽量品の、前に申した父なる醫者と狂える子との譬喩の中に、毒に中てられることの軽い者は直に藥を服んだけれども、甚しい者はどうしてもこれを服まないといふことに於て、父は尙ほ之を悲しん

で方便を設けて他國に行つて、父は死んだといふことを傳へて驚きを與へて其の藥を飲まさうとする場合に、使を遣はした。其の使を遣はして還つて告げるといふことが、末法に上行菩薩が出現して法華經を弘められることだといふやうになつて居る。お經もさうなつて居るし、日蓮聖人は本尊鈔の中に「今の遣使還告は地涌なり」と言はれて居る。即ち涌出品に於て出現したる所の本化の菩薩が釋尊の使になつて出て来て、さうして吾々の目を覺ますのであるといふことを言はれて居る、此の釋尊の使となつて出て来て我等を覺醒せしめるといふことが大事な所である。今の日蓮門下のやうに釋尊の使といふことを忘れてしまつて、「日蓮聖人の方が上だ、釋尊は隠居されて引込んで居る」といふ風な、さういふ侮蔑的の事を釋尊に就て考へては駄目である。法華經に現れたる僧寶は、釋迦如來の使として我等の爲に警告を與へられる役目である、それが日蓮聖人及其の

流れを掬む人々の使命である。

(二) 棄身存法

其の次には其の委託を受けた法華經の宣傳者は身を棄て、法を存するといふことがあるので、これは薬王品に薬王菩薩が爲された事として説かれて居る即ち薬王菩薩が臂を焼いて法華經に御供養を申し上げた、それを經文には

善い哉善い哉善男子、是れ眞の精進なり、是を眞法を以て如来を供養すと名く。

と説かれて、薬王菩薩が自分の身を殺して法華經の爲に捧げられた事が、本當の精進の行であり又本當の法供養である。法供養といふのは法の爲に供養するといふことで、それは唯だ南無妙法蓮華經と唱へるとか、お經を讀むとかいふことではない、命懸けで法華經の爲に盡すといふ、法は重し身は輕し、命を棄て、でも法華經の擁護に盡すといふことが、毎日々々朝から晩までお經を讀んで居る者よりもモツ

るのも、假令此の身は木端微塵になつても法には傷を附けまじといふ精神から出でたことである。此の精神が傳つて、例へば常樂院日經上人の如く、假令竹筍を以て頸を斬らるゝとも命の通はん間は法華經の爲に盡さなければならぬと言つて、彼の不惜身命の行をやつたのである。法を輕んじ道を忘れて、唯だガチャ／＼形式的の事をやつたからといつてそれが法華經の爲になるものではない、殊に今後の佛教はさういふことではいかぬ、精神的に本當にやらなければならぬのである。

それであるから法華經の僧寶と言つたならば、今申したやうに別頭の付囑としては『畢竟住一乘』の大きな理想を忘れぬやうにしなければならず、又諸佛所讚の文の如くに『難問答に巧にして其の心畏るゝ所無し』といふやうな性格を養はなければならぬ。又遣使還告の文の如くに飽迄も本佛の使である使といふことは古來定義が決つて居るのであつて、

ト尊い仕事になるのであるから、法を大切にするといふことは、身を殺して法に盡す不惜身命の行を言ふのだと説かれて居る。

此の『眞の法供養』といふことも、今の者は法供養と言へば唯だお經を讀むとか、或はお經の本を頭に戴くやうな事だけが法供養だと思つて居るけれども、さうではない、法華經の爲に宣傳に當り、法華經の思想を以て世に説ひ、法華經が壓迫される場合には命を懸けて教を發揚宣傳する者が、それが本當に法華經を供養し法華經の味方をするものである、斯ういふことになつて居る。それが日蓮聖人の上に最も鮮かに考へられて、身を棄て、法を存するといふことから、日蓮聖人は口癖のやうに不惜身命と言ひ、色々の迫害に出遭うては『もどより存じの旨なり』と言はれたのである。それは今の薬王菩薩が身を棄て、法を供養するといふ事から來て居るのであつて、日蓮聖人が頭の座に坐るのも、流し者にな

忠臣は四方に使用して君命を辱しめず、これは涅槃經其の他にも説かれて居る、立派な武士は假令命を失なふとも王の命を辱しめないといふ經文がある。其の如くに佛弟子が四方に傳道する場合に、身命に及んでも佛の教には傷を附けないといふことが佛弟子の第一の心得である。それを日蓮聖人は遺文の中に何十箇所引用されて居るか分らない、寧ろ身命を失ふとも王の所説の言教を匿さず、斯う言つたら殺されるナと思つても言ひ付けられた事は言はなければならぬ、大事の事だけは言ひ切らなければならぬ。昨今の新聞を見ると芳澤公使が張作霖の所に勸告に行つて、モウ戦はずに奉天へ引上げたら宜からう、戦をしても敗けてしまふといふことを言つた。嫌な事を言ふのはなか／＼言ひ悪いことで、張作霖が腹を立て、ブン／＼言つたと謂ふけれども、併し大事な事は言ひ切らなければならぬ、それが爲に自分が排斥せられやうとも、要點ははつきり言はなければ

ならぬ。それを宜い加減に、さう強く言つたら向ふの感情を害するだらうと思つて、「マア私も政府の命令で使に來た譯ですけれども、そこは御都合で……」といふやうなことを言つて居つたら要領を得ない。昔のやうに張作霖が勢力があつたならば、「何を馬鹿な事を言ふか、殺してしまへ」と言つて殺されたかも知れぬ、併し其の使命を辱しめないといふことが使に選ばれる人の第一要件である。

それを日蓮聖人は常に言はれる。法華の坊さんが僅かの事情に依つて教を濁したり、教を汚したりするやうな事をやるのは實に思はざること、言はなければならぬ。自分は不肖ながら幼少の頃より正義の觀念を以て養成せられ、我が顯本法華宗が腐敗墮落の極にあつたことを歎いて其の改革を計畫し、今日に至るまで自分は我が教團の正義の中心を以て自任して進んで來たものである。昨今の状態を見ると我が教團も甚だ憂慮すべき状態に置かれて居るやうに

思ふ、どうか諸君は統一團の教化を通じて、唯だ宜い加減の信念を以て終らずに、法華經の御教の如くに、日蓮聖人の指導の通りに正しき信念を續け、又正法の爲に擁護の任を完うして、不肖多年の努力が水泡に歸さないやうに、教の爲に協力一致して進んで戴きたいと思ふ。

四、本尊鈔の結文

經文の三法式に關する名句としては以上で結んで置くが、此の精神を日蓮聖人の遺文の方から纏めて置きたいと思ふ。それは本尊鈔の結文といふものを忘れてはならぬのである。本尊鈔は本尊の事に就ての義解として書かれたものであるが、其の結文に佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此の珠を裏みて末代幼稚の頭に懸けさしむ。

これが本尊鈔總結の文と言つて、一切を纏めたお言葉である、即ち吾々が本尊を拜し信仰を纏める教とある、此の珠は釋尊の功德である。これに依つて釋尊と、妙法蓮華經と、日蓮聖人と、吾等の信仰といふものゝ意味合が能く分るのである。これが一番整頓した聖訓であつて、今まで法華經の名句として紹介した三法式の一切がちやんと此の言葉に纏つて居る譯である。であるからお題目を唱へたりお經を讀んだりしたならば、併せて必ず此の御遺文を讀むことが最も宜しいのである。これを擴げれば法華經の名句に現れるのであつて洵に結構な教である。幸にお互に斯様な教に近づくことを得て研讀を共にし得るのは此の上もない光榮として、益々信解を磨いて行きたいと思ふ次第である。

x
x
x
x

なつて居る。さうすると吾々の信念の纏め具合は、先づ佛様があつて大慈悲を起し下されて、ごうぞ教つてやりたい、護つてやりたいといふ此の温き御心の働きから出て、さうして廣くは一切經を説かれなければ、最後に「妙法五字」に纏めて、此の妙法五字を袋のやうにして其の内に此の珠を裏んだ、「此の珠」といふのは前に申した釋尊の因行果徳の功德と言つて、釋尊が菩薩行に積まれた功德、佛として働かれた功德、其の廣大無邊の功德を珠に譬へて、其の功德を妙法五字の袋の内に裏んで、さうして「末代幼稚」といふのは吾々である、其の「頭」といふのは吾々の信仰を言ふのである、「懸けさしめる」といふことは使を遣はしてといふ事で日蓮聖人が出て信仰の心得を説いて我等を導きたまふので、此の佛が大慈悲を起すことが佛寶、妙法五字が法寶、懸けしめるといふ所に僧寶があるのである。末代幼稚といふのは我等であり、頭といふのが即ち信仰で

日什大正師略傳 (第五回)

故權大僧正 竹内日照師記

八、貧苦と戦ふ

元中二年(北朝至徳元年)上人七十一歳、これより専ら武家を諫訴せんとし、先づ奉行所松田丹波守に至つて宗義を訴へた。然るに管領家の加言なくば足利將軍に言上し難いといふに依り、轉じて管領細川武藏守に至り、我は鎌倉本興寺の僧なり、天下泰平國家安穩の道は諸宗の邪義を禁遏して、日蓮所弘の妙法蓮華經を信仰するにあり、願くは此旨を採用したまはらんことを訴へた。管領の曰く、予は鎌倉の推許なくば言上すべからざる法式である。上人曰く推許なしと雖も梶原美作守の内狀あり、亦吾訴へは偏へに君のため民の爲め國のために天下に正法

を弘めん事を請ふのみ、願はくは言上し給へ。此の時武藏守、
 「其趣旨以何なる事なりとも、關東の推許狀なくんば取計らび難し」とて言葉を左右に托し、座を立て内に入つてしまつた。上人は止むなく京都を發して下總に來り同國市川の道光といふ人の助力に依り、安房守殿の推許狀を得て、急行上京し、足利御所の近侍會我殿に就て訴へた。主人の曰く「訴訟の旨最も貴く殊勝に存す、實に是れ一大事、輕々に上へ言上せんこと甚だ難し、然れども或は金子百貫若くは二百貫等の料を獻じて後言上すべきものである」と。上人止むなく退出した。斯も到る所の武家等皆上人の強訴を恐れ、事を難儀に寄せて言上しない。

一方に上人は七十有餘歳の老髪を厭はず、京都及び關東の間を幾度か往復し、これ迄公家の奏聞、武家の諫訴で路用其他、莫大の金を費やし資縁既に盡き非常に窮乏を極め辛勞苦痛殆んど言語に盡し難き有様であつた。さりながら一身の貧苦や苦痛は決して此老偉人の心を奪ふに足らない、燃ゆるが如き信念と捨身決定の勇猛心とは愈々盛んにすす／＼振ひ時恰も炎熱金をもとろかすやうな夏の際中室町六條坊門の庵室に九十餘日の間大法延を開き、法華經の實義をととき、諸宗諸經の義を説破し、立正安國の大道を示し盛んに法鼓をならした。そも此の庵室は有縁の信士天王寺屋通妙がかねて上人の化導によくし、我が宅を正法の道場として献じたのであつた。元中二年(北朝至徳二年)上人年七十二、京都の弘通も資財既に盡き、諫訴の便宜を得るに苦しみなれば御分國に在つて訴へんとした。上人は遠江國に至り守護所今河越後守に訴書を呈して法義を宣べた。

同國見付宿に本立山玄妙寺を造立し、同國吉美の庄小山田に妙立寺を創立し、在國約一年十有數個寺を建立した。再び白河越後守の邸に至り、宗義を訴へた。元中二年上人年七十五日後を使僧として近國の諸寺に遣し、普く告げしめて曰く、
 「日蓮大聖人宗旨建立の後、未だ廣く流布せず門下たるもの一日も安んずべきものにあらず、俱に異體同心の祖訓を奉じて大法の宣傳に勉めねばならぬと激令した。八月二十一日弟子日妙上人の一週忌に當り、諷誦文を草して之を回向した。同二十五日諷誦文の裏に左の置文を書して後代に遺した。

一、門中可得し心事 大聖、御門第六門跡並三天目等、一流皆依有方軌佛法共背、大聖、化儀處子同心、也直日什、仰歸、日蓮大聖人處也門弟等深可存、知此旨者也但於下總真同、有歸伏狀並起請文、雖、然、依違法門、並法軌大聖、御義、捨申、處也、捨惡知識、之質也、右日什之門弟等尋此旨於此旨、違背輩、者可爲謗法墮獄、罪過爲、後日、置文狀如件

嘉慶二年戊辰八月二十五日

二位僧都 日什在判

(次續)

記事

本多猥下社會功勞 恩賞祝賀會に於ける 社會教化大講演會

四〇

品川妙國寺檀徒並に正法護持會員主催の下に、猥下の社會功勞恩賞祝賀會が、而かも未曾有の社會教化大講演會として新春二十日午後一時より妙國寺を第一會場とし、隣接の城南小學校を第二會場として一齊に開かれた。

第二會場では正一時、岩野直英閣下開會の辭に次いで、佐藤皐藏閣下は「所謂新思想と日本國民の本領」に就て御講演中、第一會場では、本多猥下大導師の下に莊嚴な修法が奉行され終つて、市川榮吉氏檀家總代謹で紀念品の贈呈に、引續き、正法護持會代表秋澤吉藏氏及び、地明會代表川原謹子女史の祝辭朗讀あり。時に、猥下は、今度恩賞を頂けるは三十餘年間帝都に接せる此妙國寺に住職として其生活の保證をば與へられたるは我活動に隱然たる後援たりし事を感謝され、乃至四恩に報謝すべく祝賀會を簡單にして講演會を主眼とせしを衷心より歎ばれ御着席

是より大講演會に移る。

第一會場では萩野慶三氏司會者としての挨拶に次

本多猥下登壇「佛教より見たる思想問題」の題下に、御即位勅語結文に於ける「教化ヲ醇厚ニシ民心ノ和會ヲ致シ」の一點は特に深思を要す、人間たる眞價は教化を稟くるに由るが故で、佛陀の五十年間師子吼は實に鬱然たる教化の源泉でありこれに神、儒の二道を加へたる三道の融合に論及し我國文化の正法を闡明せられ甚大なる感激を聽衆に與へらる。

續いて露國通の

橋本虎之助騎兵大佐は「露國の近況に就て」彼の農業状態より、新經濟策及び勞働者と農民の關係乃至勞農共產黨は一般國民に對し其態度の如何又是れが國民の幸か不幸かに就ての實際をば縷述ありて宛然吾等は露國に遊べる觀念を與へられた。

十分間休憩の後、教化團體聯合會參與たる、加藤咄堂先生其雄辯を以て「教化中心の時代」たるべき事を、御即位勅語より遡り、我建國の歴史から萬世に比類なく皇室と人民の關係を詳説し、順次近代に及び更に歐州文明の經路を指摘し、其思索時代より實驗時代に移れるを引證し、今や法律萬能から教化中心に来ることに就いて幾多適切な譬等を挙げ聽衆を悦ばしめ、續いて

佐藤鐵太郎閣下「所感」は豫定時間も迫れる事とて簡明に而かも巧妙な喩を假りて、猥下永年の御盡瘁の酬いられたるを歎び、師弟友情の美を發揮されたのは一般の特に肝銘する所であつた。やがて萩野司會者の閉會の辭に續いて

佐藤皐藏閣下の首唱萬歳の響は餘韻ながく、第二會場に於ける、宮岡直記閣下の萬歳發聲と相前後し目度度く兩會場に於ける大講演會を終了し、進んで第三の幕に入る。

午後五時三十分、席定まるや、鈴木檀家總代の開會の辭に次で、大橋府立第八高等女學校長來賓總代として起ち、我品川町が教化事業といふ此實質で其

効果をあぐるに難い仕事に就いて、日本のみならず世界的に顯著な、本多猥下を有することは我等の大なる誇であること、其法勳を激賞讃美されたるに對して、猥下は、本日の催しに就き、主催者側を始め來賓者各位に感謝され、當時若干微恙の爲め茲二三ヶ月徐ろに靜養を加へ其健康恢復を期し、更に大に聖恩に報ずると共に諸氏の厚望に添ふべく精進致し度いとの旨答辭あつて小宴は開かれた。

開會中に、岩野閣下先づ感想談あり、和賀義見師は、恩師猥下四十餘年不惜身命の護惜建立に對し現在宗門の萎靡無力を慨せる舌端火の如きあり、梨本政吉氏の詠歌と自強術の勸誘に次で、山口智光師の夢物語りと詩吟等、田中道爾氏の感想に次で、小原閣下の輿論釋明より異体同心の聖訓を奉じて立正安國の淨行に努力すべきなりとの斷案徹し、最後に佐藤閣下は御自身今回の叙勳よりも、猥下の恩賞に對して厚く其喜悅を捧げらるゝ美はしい口吻に無形の華花は馥郁として芳香席に瀰く其雰囲気中に、閣下主唱の萬歳を、皇居に面し一同謹嚴に且つ熱誠に和唱し、嬉々として散じたのは午後六時四十五分、

本多猥下のラヂオ放送

妙國寺本堂のさしも廣きが當日立錫の餘地さへなき
數時間以上の大會合に糸亂れず皆悉く相愛敬虔の
態度たりし事は全く信仰教化の賜物で廣くこれを各
所に實行して頂きたいと思ふにつけても亦殊更 猥
下の御高德が偲ばれて深い。

~~~~~

十二月號日什大正師略傳にて冊八頁上段十行目  
の「談じ」は「談じた」四十頁上段十一行目「東  
京」は「東乘」の誤字ですから訂正して置きます。



二月十日第二日曜日午前十時より約一時間「理想  
的修養」と題して、人格の向上には修養を加へざる  
可らず、其修養たるや理論と實行共に相整はざる可  
らず、而かも我日本に於て透徹せる前賢の明教ある  
にも不拘、多く偏狹の學に墮せるは慨歎至極なり、  
宜しく惟神の大道と、聖賢の明教と、佛教の信仰と  
に相倚り、個人にありては家庭社會に善處し、國家  
に對しては皇室の尊嚴國運の發展を、天地に對して  
は須らく敬虔感謝の意を表し人生たる意義を全ふせ  
ざる可らず。とて儒者、學者、教育家幾多先人の困陋短  
見を剔扶し、聖德、傳教、弘法、西山公等の前賢碩德  
特に 聖日蓮の三教協力融合を發揚し、我文化の進  
運を歴史的に立證し、即ち 教化醇厚の聖慮を躡し  
たる修養講座で近來耳にせざる尊き放送であつた。

## 知法思國會第四回懇談會

昭和四年一月二十六日第四土曜日午後四時、神田  
一橋、學士會館に於て第四回懇談會開催し、嘉納治  
五郎先生「歐洲巡歴所感」の講演あり。其綱目は日  
本の地位、今や歐米諸國に於て逐日重要視されつつ  
ある事にして、吾人の曾て傳聞せる以上なり。殊に  
先生の直接關係ある柔道に到りては、先生に依り世  
界の牛耳を握られ益發展顯著なる一事甚だ愉快に是  
れ感謝する處なり。

先生降壇に際し其實感を告げて曰く「今や世界各  
國の民衆は上下を通じ悉く必死的の勇姿を以て努力  
せり、蒼皇歸朝し國內耳目に觸る處、眞に寒心に堪  
へざるものあり、大に覺醒なくんば遂に危からん矣  
願くは吾等滿腔の赤誠を捧げ、最善の努力を竭し以  
て國運の發揚を期せざる可らず」と、凶惡を轉じ吉  
祥に向はしむ憂國護世の熱辨に一同、一種のヒント  
を獲ると共に本會の責任愈々重且つ大なるを惟ふ。  
當日は生憎他に二三の會合ありたるも知法思國の  
三十餘名士參加頗る盛會を極む。嘉納先生の講話

に就て二三の質談應答あり、終つて晚餐に入り、食  
後の懇談「教化の方針に就て」の主題に對し先づ  
本多猥下 本日嘉納先生の有益なる講演拜聴につ  
き一同満足感謝の意を表され、偕此會合は聽講と懇  
談を交ゆるものなるも、聽講を主とし食後は一定の  
題下に懇談致すべく、今晚の主題の趣意は民心教化  
を旺盛ならしめざる可らずと雖も而も正善ならざる  
可らず故に其精神と方法は慎重なる吟味を要し、研  
究を重ねる要あり。我等の主義方針に於ける具體案  
として大體は國體擁護、皇室の尊嚴其發揚を中心と  
なすは勿論なるも更に人生觀と宇宙觀の根據なき時  
は淺薄たるを免れず、とて、神道儒教乃至科學の短  
を指摘し、佛教思想の整頓圓熟を稱揚し遠大なる着  
想に仍て萬全を期せざるべからざる旨の挨拶ありて  
次に  
嘉納先生今より直ちに千葉行なりと前提し、私は  
已前基督教等の排斥黨なりしも、現在は三教いづれ  
も捨つ可きに非らず各其特長を採用し、又拂教に於  
ても可成平易通俗的に又各宗協同融合し相互偏へ  
に國家の爲めに進まれてはどの意見を遺して辭去さ



れ、次で

佐藤臙閣下 起立、私は宗教方面は闇黒なれば  
軍人側より精神的鼓吹するに、内面よりと形體上の  
二方面あるも且らく内面よりのものは措き、形體上  
より申すべしとて、中將は今日思想激變の原因が西  
洋物質文明に基し生活の脅威に及びマルクスの唯物  
史觀は東洋、殊に我日本には全然該當せざる點を摘  
發し、しかも日本人の漸次變色するは要するに彼等  
に乗ぜらるべき素質あり即ち弱きを扶けて強きを挫  
く此弱きを扶くる方は無難なるも強きよ破折するこ  
そ危険性を含むなりと義俠的の旨斷を幾多適例を以  
て論じ、今や失業者、生活難、小作爭議等各種の悲  
慘救済を要する際に富豪の贅澤浮華、爲政家の不謹  
慎放縱を見聞せる民衆は嫉視反感を懷かん、これや  
がて社會の大なる欠陥を招致せるに非ざるなきや、  
本會は一方民衆に對する教化と、他面彼等を改悛せ  
しむべき形の上よりの制裁を痛感す。等々々々

伊東竹三郎氏、曰く過日聖徳太子憲法の序文を拜  
讀し感激默する能はずとし、目下此思想混亂に對攻  
するは獨り 日蓮聖人の教化に信伏隨順あるのみ、

先日〇〇博士を帝大に訪問せる時、左傾派學生は  
約五十位にして全校を左右す、即ち穩健派は常に鎮  
黙を守るも彼等は積極的活動せるに因ると聞く、又  
本會の宜しく考慮に置かざる可らず、由來日蓮門下  
は化法化儀を論ず、今や此化儀の方面を再興せざる  
可らず、至誠一貫何事か成らざらんとてかの日本宗  
教講演大會も實に及川氏獨創一箇の赤誠より今日の  
大に及べるを稱歎し本會の實行運動に對する熱望あ  
り。

本多猥下 最後に起つて、教化方針と直接の關係  
なからんも、本會創立よりの經過に就て一言述ぶる  
要あらん。

抑も日蓮門下現在の狀態にありては國家に對し亦  
大聖人に對し全く申譯なし。明治維新の際王政復古  
されし場合に我門下は直ちに參加し大に活扼すべか  
りしならん然も史上に於て何等の貢獻を見ず依然  
大聖人の攻撃されたる状態を續け宗教的には迷信の  
團體、道德的に無力の烏合、文化上に於ては無知の  
民衆たるは遺憾に堪へず、現狀も後日考ふれば門下  
の萎縮不振に就て後輩の笑草たるか。

しかも門下の分派を歎じ明後年宗祖六百五十年遠忌  
には此機逸す可らず精神的に各派堅く握手し互に聯  
合協力し以て法國の爲めに盡瘁なからざる可らずと  
慨し。次で

山口智光師其幼少時代兩國の橋上より見たる一錢  
蒸氣と、現在責任を有つて見たる一錢蒸氣とは大に  
感想異なり即ち曩には曳かれつゝある客分なりしも  
今は曳くべき機關の方なり、上求菩提下化衆生の姿  
を一錢蒸氣にも示す、世上又教ならざるなし等、や  
がて

佐藤梅太郎氏 現代世相は表面形式は全く何に倚  
らず巧妙を極めをるも其奥の精神に入りては至誠の  
念薄く、世を擧げて自我に馳せ我利を満足せしめん  
とし、聊かも君國の爲め乃至犠牲の精神見る可らず  
宜しく佛教の化導殊に 日蓮聖人の御遺訓に隨ひ至  
誠愛國の精神を開發するに勉めざる可らず等、次で  
井上道太郎氏の感想談は都合により省略し、其後  
三吉顯隆師 起て本會は内部の準備已に完備し機  
既に熟せるが如し此際一日も妥如たる可らず速に實  
際運動に進出せんを可とす。

而して此知法思國會は昨年二三の同志に語り賛同  
を得たれば俄に創立し、其後門下各派悉く賛同し殊  
に日蓮宗の大團體より熱心に參加希望あり、管長始  
め宗務總監及教學部長等幾多の元老と會見し堅き誓  
約ありたるも先頃御大典宣傳及び宗内役員移動等の  
爲め若干接近を缺くも近々相提携し大に躍進せん。

本會の仕事として思想懇談會と宣傳上には、雜誌  
『教』を以てす、講演も本會名をば出さざるも常に  
其主旨に基き各所に於て開催しつゝあり、願くば全  
國日蓮門下の僧俗男女は此光輝ある運動に參加せら  
れたし目下本會の活動遅々たる觀あらんも寧ろ周圍  
の事情こそ之を然らしむるもの、本會としては永久  
的なれば充分研究し慎重に進み居れり、宜しく特志  
人格者の正定聚を以て君國の爲めに精進されたしと  
本會の宣言書及び宣傳綱領を朗讀ありて一同希望に  
輝く。其後諸氏の雜談盡きざるも漸く午後九時四十  
五分名殘惜しくも散會す。

× × × × ×



近來各方面よりの教報が漸次減退して來たやう見受け、併し實際は益布教宣傳されつゝあるべきと思ふ、可成廿日の締切り迄にお願ひ致したい。  
「教化チ醇厚ニシ」又「教化チ數キ」等の風潮に感みて愈異林同心に誠情建立なくば後日のお土産がない。  
經云「所作佛事未嘗暫廢」本多大僧正親下は衣更着の烈風中に常例にも超へ統一閣並に每恩恩等に於て數度の御親教あり且つ知法恩國會の幹旋等吾人は自ら漸愧感奮せしめらる

▽大阪教報△

十二月八日蓮成寺にて立正安國論講義上田師 十二日堂開寺にて偉人の光輝京師佛敎の概要上田師 二十二日蓮聖人の報恩會を終し不惜身命の師を偲びて京師師範本法師の主張上田師 一月十二日法國又合京師佛敎の境地川崎本山部長 二十二日教化の實地紀野布教師國民生活と日蓮主義京師師 二十七日蓮成寺にて久遠宮殿下の在せし日を偲て大庭中佐 二十八日徳永宅にて感激の精神徳永氏法悦の生活京師師 二月一日堂開寺にて先住古谷上人の十七回忌法要を修し放逸者五慈和井田氏何れも頗る盛會多大の効果を奏せり。

計 報

○統一閣本部理事陸軍少將小原正恒閣下は非常にお見うけした處は若かつたが御歳を聞けば本年七十八歳の高齡者壯者を凌ぐ元氣な人であつた、信仰も仲々強盛であつた、大概日蓮主義に關係のある會合にはお顔の見えぬ事はなかつた、よく統一閣の爲めに御盡力下され又吾々を鞭撻もして下すつた切な人であつた丈けにそれ丈又印象が深い、去る二月十九日風邪が因で終に逝去されました事は呉れども残念に思ひます。茲に深く感謝申し上げますと共に謹で悼意を表します。尙閣下の御法名に

天真院殿正恒日行大居士靈

(正五位勳三等功四級 陸軍少將小原正恒閣下)

昭和四年三月十九日午前一時逝去

南無妙法蓮華經

末法の佛教

會費 拾貳錢 七拾貳錢 壹圓四拾四錢  
送料共 同 同

末法の佛教は大聖人の御魂の叫のそのまゝです。この叫びにお互は覺醒し精進して眞の生の喜と幸福を味ひませう。

- 一、大聖人御遺文を毎月發行するのです
- 一、文体は全部かなが付て居ります
- 一、難解の文には略註があります
- 一、每號聖蹟か聖傳か聖筆の寫眞が入れてあります
- 一、實費で御分ちするのです
- 一、見本御入用の方は金十錢封入御申込み下さい

申 込 所

- 東京淺草清嶋町 統閣圖書部
- 東京四谷南寺町法恩寺 遺文普及部
- 東京神田三崎町二ノ二 振興社

電話東京五六一四二番

教

第四卷 第二號

人我世 御製數首 明治大帝  
心日界 ツビエツト露西亞の 橋本騎兵大佐  
教本思 現狀に就て 本多大僧正  
化人潮 佛教復活の先序 立正大師  
ののの 聖語教節  
燈自融 恩賞祝賀大講演會記事他共  
明重合

毎月十一日發行 一部金拾錢 (郵税五厘)

東京府下品川町南品川四一二

發行所 『教』 發行所

振替東京一〇九四〇番



▼近刊▲

本多大僧正著

法華經要義

四六判約七百頁  
總振かな付美本  
【定價金參圓】  
送料十八錢

日生現下生知の妙悟、法華經十卷の教義を整理し  
極めて平易明徹の講述なれば僧俗共に至寶たらん  
◎來四月發賣に付三月二十日迄に「教」發行所への  
御振替申込に限り特約二割引を以て送本可仕候

▼豫告▲

| 統一定價 |        |        |
|------|--------|--------|
| 一冊   | 半冊     | 一冊     |
| 金貳拾錢 | 金壹圓貳拾錢 | 金貳圓貳拾錢 |
| 送料共  | 送料共    | 送料共    |
| 金前   | 金前     | 金前     |

| 統一廣告料 |     |     |
|-------|-----|-----|
| 表紙    | 一頁  | 一頁  |
| 拾五圓   | 拾五圓 | 拾五圓 |
| 圓     | 圓   | 圓   |
| 圓     | 圓   | 圓   |
| 圓     | 圓   | 圓   |

昭和四年二月廿四日印刷納本  
昭和四年三月一日發行  
（第四百八號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

編輯兼發行人 小林順義

印刷人 鈴木日雄

印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百八十一番地  
郡印刷所 電話高輪六〇二四番

不許複製

發行所 統一發行所

振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

|                    |      |
|--------------------|------|
| 小乗觀に就て.....        | 本多日生 |
| 日什大正師略傳(完結).....   | 竹内日照 |
| 知法思國會第五回懇談會記事..... |      |
| 各地教報.....          |      |

第三十四年四月號

統一

